

聖書:使徒の働き15章36節~16章5節

説教:見いだされたテモテ

はじめに

それが前回までのあらすじをふりかえります。多くの異邦人が救われていくのを見て、あるユダヤ人が異邦人も割礼を受けるべきであると言いだし、大きな騒ぎになります。エルサレム会議の結果、割礼は必要ないけれど、信仰者としてふさわしい行いをするようにと、丁寧に書かれた手紙を送りました。これを読んだアンティオキア教会は、それまでの対立があったのが嘘のように皆が一致し、喜びに満たされていった。

そして今日の箇所は、パウロとバルナバが再び伝道旅行にでかける場面になる。ところがここで問題が起きる。バルナバはマルコと呼ばれるヨハネを連れて行こうとしたのに、パウロが強く反対して激しい議論になってしまい、結局二人は別々に伝道することになった。前回の旅行のときに途中で帰ってしまったヨハネはふさわしくないと考えたのでしょう。いつも言いますが、普通ならこれは都合が悪い話ですから隠すべき所です。ところが聖書はそのまま各。なぜでしょう。人の目に悪いことに見えても、すべてを益としてくださる神がおられる。使徒の働きはそのような姿勢で書かれているからです。ではどんな益があったのか。そのことを考えてまいります。

1 テモテ

1) 父はギリシャ人で母はユダヤ人

16章1節を読みます。「それからパウロはデルベに、そしてリステラに行った。すると、そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ人女性の子で、父親はギリシア人であった。」

以前の伝道旅行のとき、石打にされたパウロのけがの状態がよくないという理由で引き返した町がリステラでした。あれからおよそ三年経ってその町に戻ってみると、テモテという一人のクリスチャン青年がいた。パウロがいない間に、このようなクリスチャン家族が育っていたのを見てパウロは嬉しかったらと思います。母はユダヤ人で、父親は地元のギリシア人。今で言う国際結婚です。パウロはテモテと一緒に連れて行くことにします。

2) 働き手の養成

なぜ連れて行くか。二つ理由があります。一つは指導者を育てる目的です。テモテの家族のように

次々と信仰者が起こされても、指導者が圧倒的に不足している。働き手を養成しなければなりません。もちろんだれでもよいわけではない。テモテはイコニオン教会でも評判がよく、献身者としての資質をそなえていてぴったりです。

3) ユダヤ人と異邦人の問題

二つ目の理由。これはユダヤ人と異邦人の問題に関係しています。異邦人が救われたときユダヤ人から異議申し立てがされました。エルサレム会議でその問題を話し合った結果、民族の違いや差別はないことが確認された。そのことをイコニオンの教会が聞いた。それで5節。「諸教会は信仰を強められ、人数も日ごとに増えていった。」

ユダヤ人と異邦人の問題は、イコニオンの教会でもくすぶっていたのでしょう。そこへ、パウロの口から何の差別もないと聞いたので皆喜んだ。それはよい。ではそれで問題は全部なくなったのか。人の心はそう簡単には変わらない。やっぱり、ユダヤ人と異邦人の違いを気にする人たちが出てくるだろうということは十分に予想された。実際、トラブルが起きていったのです。パウロはそのことを考えていた。ちょうどそのときテモテを見つけ出します。母親がユダヤ人で父親がギリシア人。テモテこそ、ユダヤ人と異邦人の両方の側に偏ることなく立つてものを語ることができる。これがテモテを選んだ二つ目の理由です。

2 ユダヤ人のために

1) 割礼を受けさせた

しかし一つだけ問題がありました。3節。「パウロは、このテモテを連れて行きたかった。それで、その地方にいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせた。彼の父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。」

ここで問題となってくるのは、テモテは何人なのかです。つまり国籍です。今なら国の法律で決めることになっていますが、当時そのようなものはない。ユダヤ人社会では、子どもは母親の血統を引き継ぐというのが当時の習慣でした。ですからテモテはユダヤ人社会ではユダヤ人とみなされていた。いっぽう、地中海社会では日本と同じく父親中心なので、テモテはギリシャ人とみられていた。この家族は、テモテをどちらの国籍で育てた

か。ギリシャ人のように育ててきた。ユダヤ人ならば必ずするはずの割礼を、息子に受けさせなかったから。テモテが一人の信徒の立場にとどまるなら、なんの不都合はなかったでしょう。ところが、テモテをユダヤ人と異邦人のどちらにも公平に語ることでできる伝道者に育てようとしたら、割礼を受けていないことが障害になると考えた。というのは、割礼があるかないかがユダヤ人の存在証明だからです。ドイツのナチス政権がユダヤ人迫害したとき、割礼があるかないかでユダヤ人を見分けたそうです。それくらい割礼のありなしは大切だった。もしテモテが割礼を受けないままでしたら、ユダヤ人に福音を語る時に必ずその点を指摘され、信用されないだろう。それでパウロはテモテに割礼を受けさせることにしました。

2) I コリントで言っていることと矛盾するのでは？

ところがパウロは別の箇所でも矛盾するようなことを言っている。これをどう考えるか。第一コリント7章18～20節。「召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくそうとはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。割礼は取るに足りないこと、無割礼も取るに足りないことです。重要なのは神の命令を守ることです。それぞれ自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。」

「召されたとき割礼を受けていなかったなら、割礼を受けてはいけません。」これはテモテにあてはまります。それなのにどうして割礼を受けさせたのか。パウロは都合に合わせて言うことをころころ変えるのか。そんなことはないはずです。

3) 隣人を愛する

I コリントは、一般の信者に向けて書かれていることがポイントです。一般の信者であれば、信じたときの状態にとどまっていなさい。それで終わりです。しかし、テモテのような伝道者となると話は変わる。イエス・キリストの福音を伝える者となろうとするならば、また違う基準を考えなければならぬ。違う基準とは何か。イエスはこう教えました。マルコ12章31節。「『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」

信じたときの状態でよいという原則はあります。しかし献身者となるならば、もっと高い基準を考えなければならぬ。それが「あなたの隣人を自

分自身のように愛しなさい。」です。問題は、愛するとはどんなことかです。パウロはI コリントに書いている。「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。」

ユダヤ人を愛するがゆえに、あえて割礼を受けてユダヤ人となる。これがパウロの考えたことでした。

3 働き手を送ってください

1) テモテを見いだす

北海道聖書学院 (HBI)では、4月からの本科の新生はいないそうです。他の神学校も新しく入る人が少なくなっていると聞いています。こんな状態ですから、これから先どんどん働き手が足りなくて、無牧の教会が増えていくだろうと言われています。「収穫の働き手を送ってください」と祈られます。

パウロも同じように祈っていたでしょう。これからますます救われる人は起こされるでしょう。けれども、教会の指導者が全然足りません。なんとか指導者を育てる必要がある。そういうときにパウロはテモテを見いだしていく。これは偶然ではありません。まず、パウロの最初の伝道旅行のときにテモテの家族が救われました。その後でユダヤ人と異邦人の割礼に関する問題が持ち上がり、二つの民族を和解させていく難しさが見えてきた。どうしようかと思っていたちょうどそのタイミングで、ユダヤ人と異邦人の両方に立つことのできるテモテを見つけた。すべては神のご計画としか思えません。

そうするとどうなるか。パウロとバルナバがマルコのこと意見がぶつかり別々の道に行ったこと。もしあの日何もなかったなら、テモテというもっともふさわしい働き手に出会えなかったかもしれない。後から振り返れば、意見がぶつかったことも益に変えられたと見ることができます。

2) へりくだる者に

いま教会では新しい年度の活動について計画を立てようとしています。この教会の後任牧師を具体的に進めていくことになるでしょう。どんな人が来てくれるのかと不安と期待が交錯しているでしょう。来てくれるなら、だれもよいわけというわけにはない。今日の箇所から少なくとも二つ言える。テモテは、兄弟たちの間で評判のよい人物でした。その人が持っている信仰は良いことも悪い

ことも全部表に出て来ます。ふさわしい人であるかどうか、皆が一致してわかる。

二つ目。テモテは異邦人のままでいることもできたのですが、ユダヤ人を獲得するためにユダヤ人と同じようになるために割礼を受けました。神が送ってくださる働き手はこのような人です。ときどき勘違いする人がいるのですが、牧師は信徒の上に立つのではない。教会のなかで一番低くなることができかどうか。十字架で身を低くされたイエス・キリストの姿がその人を通して見えてくるかどうか。そこが大きなポイントになるでしょう。

では私自身はどうなのか。おまえは人にお説教するほど身を低くしているのかと問われたら、穴があつたら入りたいくらいです。私にはできなかつた分、新しい人に期待していただきたい。みなさんがキリストを見上げながら「働き手を送ってください」とへりくだりながら祈るなら、必ずふさわしい人をお送ってくださる。その人がこの教会にふさわしいかどうか、みなさんは見分けることができます。なぜか。この教会はこれまでいろいろあつたけれど、すべてのことを益としてくださる神がすでに準備してくださっている。そのことを信じたいと願います。